土づくりを土台に、燐硝安加里を投入

大臣賞に輝く、西尾さんの茶樹栽培

河見　泰成

明治，大正，昭和3代の親子が居住を共にする西尾さん一家

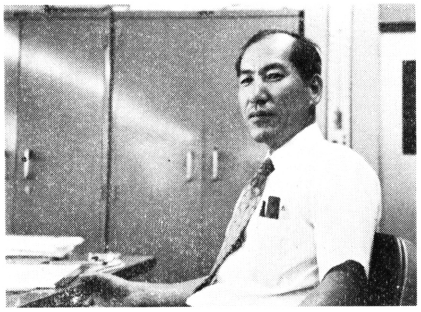
茶と云えば静岡，静岡と云えば茶を連想するほど，静岡県のお茶は知られている。

その静岡茶の産地の1つである磐田市台地の一角（磐田市笠梅 1,575）に，西尾正吾さん（35才）という茶園農家が在住されている。

昭和52年までに170ａを200ａに規模を拡大する目標で，耕土1m下は「盤層」という悪条件下で茶樹栽培に精励し，42年の全国茶園共進会では栄えある農林大臣賞を授賞されている。

しかも西尾さんの肥培管理たるや，もっぱら「土づくり」（有機質多投）を土台とし，燐硝安加里を主体とする施肥設計で，毎年着実に成果をあげている。

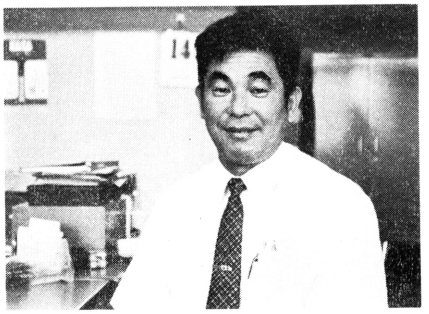
"ちょうど一番茶が終ったあとでもあり，そちらの都合次第で，一度西尾さんのお宅へ伺ってみたいと思いますが……。" という連絡が富士市駐在の鶴岡さんからあった。さっそく7月14日の朝，新幹線で浜松駅へ出て，快晴の旧東海道を静岡方面へ戻って，天龍川を渡ったところが磐田市である。



鈴木指導課長（磐田市農協で）

磐田市といえば，先に本誌でも取り上げた例の「水耕栽培」で注目されているところだが，その執筆者の1人である鈴木さんには，農協の事業部でお目にかかった。

"お茶の生産指導の直接担当は村田君がやっているので，ご案内させましょう。" と，鈴木課長の見送りを受けて，再び車で，磐田市の背後（北部）をえぐるように抜けている東名高速道を越えて2㎞ほど，ポツリ，ポツリと住宅や軽工業企業の作業場などが見えるほかは，海抜約50mのこのあたりの台地は，ビッシリと茶園で埋まっている。



村田さん

"あの家が西尾さんのとこだでー，ここから入ってもらおうか？" 村田さんの指示に従って，車はスルスルと舗装道路をはずれて，ある農家の前で停った。西尾さんのお宅である。

52年までに現在の170aを200aまでに拡大するのが目標

"さあ，さあ，遠慮なくお入りになって…。" と，ちょうど前庭にいた西尾さんは私たちを招じ入れた。

西尾さんと奥さん

磐田市農協を出しなに鈴木課長から "西尾さんのお宅は3夫婦（明治，大正，昭和）揃った珍らしくも目出たい家庭ですよ。" と伺っていたので，本題に入る前にまず "戸籍調べのようで誠に恐縮ですが，その点をお話し下さい。" とお訊きしたところを示すと，次のとおりである。（敬称略）

祖父母　西尾伊太郎（明治17年生）
　　西尾　けん（明治23年生）

父　母　西尾謙一郎（明治43年生）
　　西尾いそえ（大正5年生）
本　人　西尾　正吾（昭和12年生）
　　西尾のぶ子（昭和15年生）

"父母が丈夫なことはもちろんだが，じいさん，ばあさんも健康でね，特にじいさんときたら，こんだら天気のいい日にや，草とり頼んどけば，1日中黙って仕事をやっとるで"と，西尾さんのお話によると，こういうことになるが，正吾さんの子供さん達とも9人家族が，もっとも忙しい一番茶の貴重な労働力になるのだから，何とも有難い。こうなると，下世話に云う"長生き恥多し。"と云うのは当らない。（あとで圃場へ出たとき，"あれがじんさんだ"と指さす遠くの方で，黙々と動いている白シャッ姿の老人に敬意を表したことであった。）

昭和35年，97aの在来種だけの経営から，茶単作の自立経営を目指し，隔年ごとに品種茶への改植を進めた結果，昭和45年には125aの茶園の⅔を品種茶園に造成したが，47年現在では耕地面積170a，この大部分が品種茶園に新植または改植されている。

西尾さんのお宅の正面

"現在面積は170aだけんど，52年度までにはどうしても200aにせにゃ。儂としてはそれを達成するのが目標で…。実はこの向うに30aばかり有ることは有るのだけんど，ここはちょっと問題があって，じかに足を入る訳にいかんで，そのまま放ってあるよ。"

200aとひと口には云うが，200aの茶園は，この辺ではそうザラにあるという訳ではない。

"品種はやっぱ大半が藪北だね。在来種は25aある。藪北というのは中手の早生種だが，これは霜にも比較的強いし，それに収量も上がるし，値もいい。ただ規模拡大のためには，品種を一方づけてもまずいと思うので，早生種の豊緑などもちっとは入ってるけんど…。"

"忙しいのはやっぱ1番茶だね。これは機械を使わずに手摘みにするで，チビたちも入れて家内9人のほか，ことしは20人の手を借りた。4月25日から5月10日まで…。2番，3番は機械でやります。"

そして，製茶は手がけられないのですかーとの筆者の質問に対して西尾さんは，生葉を揉む（もむ）のはむずかしいこと，つまり揉む労力と，その技術とのバランスを考えると，生葉のまま手放す方が危険が少ないのではないかーという話であった。

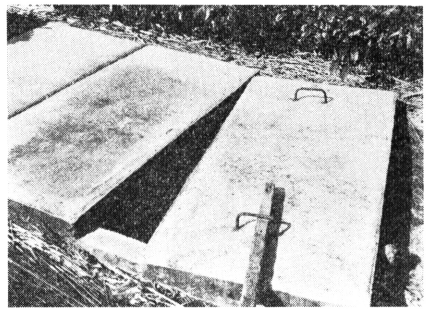
西尾さんの茶園管理と経営の特徴について

上がりがまちで直接，西尾さんから伺ったことと，傍から農協の村田さんの補足的説明と，鈴木課長から頂戴した資料をもとに，西尾さんの茶園管理と経営の特徴が，どういう点にあるのかーを示すと，大体次の3つの点にあると指摘できよう。

(1)　盤層の排水対策としての暗渠と空井戸。

磐田原台地一帯の茶の生葉生産低下は土壌を掘り下げると，ほぼ1mに厚さ10cm程度の「盤層」と称する堅い層があって，これが土壌の排水を妨げるばかりでなく，根の伸長をも阻害しているのが原因だと云われている。

一方，今でこそ市水道の完成で旱魃の危険がなくなったが，この地帯はごく最近まで天水に頼らざるを得ぬほど，水に悩んだところでもある。



圃場にある空井戸

西尾さんはこれに対処するため，まず80aに暗渠を敷設し，それにつながる空井戸（からいど）を3つ掘さくし，地下水を常時この空井戸にしぼりとっている。（現圃へ出たとき，この空井戸を見たが，約3m下に聞えるチャラ，チャラという水音は，何か象徴的なものを感じさせた。）

(2)　定置配管による完全防除

防除作業は年間10回ほどになるが，最大の悩みは水であって，西尾さんの茶園にはその面積の大部分をカバーする定置配管があり，これまでドラム缶で1日8石以上を出なかったのが，現在では25石の散布能力があり，完全防除が可能となるとともに，生葉の収量増につながったと云われる。

その結果，在来種でも2,100kg，改植10年の藪北で3,700kg（ことしは4,000kg近く）を上げるようになった。平均3,500kgとして170aで約60トンの収量を得ることになる。

大きなちがいである。

(3) 計画的改植と土作りによる早期成園化

品種茶への改植の必要性は，相当以前から叫ばれているが，そして生産農家もそれを痛感しているのに，なかなか実現しないのはなぜか？

盤田農協の鈴木課長は，その状況と西尾さんの対応策に触れ，

改植園の経済効果　(10a当り)(磐田市西尾氏)

項目	年次	1年目	3年目	5年目	7年目	9年目	10年目
	年度	昭36年	38年	40年	42年	44年	45年
改植園	収量 kg	—	250	1,700	2,800	3,190	3,684
	単価 円/kg	—	120	100	100	144	134
	金額 円	—	30,000	170,000	280,000	459,360	495,100
	累計額	—	36,600	311,100	855,100	1,612,837	2,107,937
在来園	収量 kg	1,359	1,450	1,490	1,597	2,048	2,104
	単価 円/kg	30	37	50	73	105	108
	金額 円	40,770	53,650	74,500	116,581	215,693	226,614
	累計額	40,770	140,184	266,280	501,041	868,504	1,095,118

"茶の好況に恵まれて，ぬるま湯に浸っているような感じもある。また改植による数年間の収入減も否定できない事実である。それには早期成園化への技術確立以外にはない。これらを克服して，早くから改植に着手した西尾さんの先見は，高く評価してよい。"

と指摘されているが，当の西尾さんは，

"鈴木さんからおほめの言葉を頂戴するほどのことは，何もしちゃいないけ…。たた農とすれば茶単作以外にやることがないとすれば，茶以外のことを考える訳にいかねえだ。"

と，キッパリと答えられる。何とも強い構えだ。

早期成園化実現への技術

鈴木さんが指摘されるように，改植園の収量が，在来茶園のそれを追い越すのは5年目であるが，売上金額では既に1年早く4年目で追い越すほど，西尾さんの成園化のテンポは早い。

これは単に生葉価格の高低の差から生れたのではなくて，優れた改植技術の成果であると見るべきで，この点を少し掘り下げると，次の3点に要約されると思う。

(1) 土作り（暗渠，深耕，有機質多投）

暗渠，磐田原台地は前述のように，厚い堅い盤層が雨水の浸透を阻んでいる。西尾さんはブルで80cmに起したあと，手掘りで1mの深さに土管とソダで暗渠を設け，深さ3mの空井戸に滞留水を導いている。

昨年は更にユンボで盤層を破り，直接地下へ浸透させることにしたので，1mまで深耕できるようになったが長い間には盤層が再び詰まる心配があるので，さらに暗渠も作り，空井戸に導くなど，永久的な対策も考慮されているようである。

有機質多投　西尾さんの肥培管理の最も特徴的なものとして，鋸屑堆肥を上げねばならない。

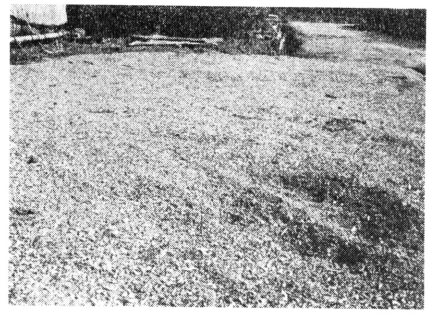
聞くところによると，改植着手当初は10a当り3トンであったが，昨年あたりからは10トンも施用しているという。（写真参照）これを鶏糞と併用して7：3の割合で施すのである。

鋸屑堆肥はチップと鶏糞を主原料に，尿素，過燐酸，米糠，醗酵菌を添加しているというが，主原料の値下りでkg当り3円ぐらいで仕上がるとのことである。

(3) 仮植後2年の大型良苗(挿木後3年)

これには自園の藪北を母樹として自給体制をとっている。挿木1年生苗を，その年の移植園の畦間へ25cmの株間で仮植する。新植園は若木の成長に最善に改良されているので，当然苗木にも最適条件となっているし，防除薬剤も濃度を変えることなく，同時に行える利点があるという訳だ。

定植　こうしてできた苗を3月に180cm×40cmに定植する。植え溝は巾40cm，深さ50cmに掘る。これに堆肥と間土を入れて有機質だけの層ができないように，テコ鍬



鋸屑堆肥

で混土しながら鋤き込む。

深い植え溝に根をまっすぐに伸長させることを主眼としているものだが，これは盆栽家が，木を曲げるために根も曲げて植えることにヒントを得て，樹勢を強め，株張りを広くさせるためには，根のタテ伸長を促すことの必要を強く感じたからであるという。

村田さんも"定植には1本1本ほんとに気を使っていますね…。"と感に堪えぬ面(おも)もちでこう云った。

(3) 成園までの管理（剪枝，肥培管理）

剪枝は2年間は中央部を低目にするよう，徒長枝をカットして分枝数を増やし，自然放任型の樹姿になることを防ぐ。その間，毎年有機質資材を2トン施用しているが，施肥，防除その他の一般的管理はすべて農協の「栽培ごよみ」によっているそうだ。

"施肥量は肥料の内容から考えるべきだと思うけど…，

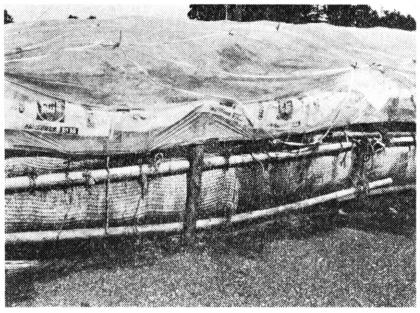
昭和47年度茶施肥基準
品種茶園用

施肥期 / 肥料名	春肥 2月下旬	春肥 3月中旬	芽出し	夏肥 1茶直前	夏肥 1茶後	夏肥 2茶後	秋肥 3茶後(8月下旬)	秋肥 9月中旬	年間成分
燐硝安加里 S811 (18−11−11)	4袋	4袋							N 115.2kg
硫安			3袋						
新緑 (21−6−7)				3袋	4袋	3袋			P 49.6kg
燐硝安加里 S604 (16−10−14)							5袋	5袋	K 59.6kg
マグポロン							4袋		

普通茶園用

施肥期 / 肥料名	春肥 2月下旬	春肥 3月中旬	芽出し	夏肥 1茶直前	夏肥 1茶後	夏肥 2茶後	秋肥 3茶後(8月下旬)	秋肥 9月中旬	年間成分
IB硝燐加安 280 (20−8−10)	3袋	3袋							N 98.4kg
硫安			3袋						
新緑 (21−6−7)				3袋	3袋				P 35.6kg
燐加安488 (24−8−8)						3袋			
燐硝安加里 S604 (16−10−14)							3袋	4袋	K 44.8kg
マグホロン							4袋		

有機を2トンずつ入れてやれば，あとは化学肥料だけでやって行けると割り切っている。あとは万事，農協の指導どおりやっとるだけだで…，格別にめられるようなことは無いわなあ…。”



有機質資材の囲い場

圃場で（左から鶴岡さん，村田さん，後に西尾さん）

と云う西尾さんをさえぎるように，

”お前さんは何もしとらんと云うけど，毎年2トンずつ有機質資材を入れるということだけでさえ大変なこっちゃ。ときにこの頃はどの辺まで材料を取りに行くのかね？”

と，問いかける村田さんに

”昔は手近なとこで集められたけど，この頃は段々とむずかしくなってなあ。ことしあたりは天龍川へ行くようになったよ。（どのくらいあるかーという村田さんの質問に答えて）”そうさな，川原まで3kmはあるかな？”と西尾さん。天龍川でとれる資材というのは，河川敷に生える葦やその他である。

おおかた語り終って門前にひろがる現場へ出る。快晴の青空と対象に美事に刈込まれた茶樹の緑が一段と美しい。

”これは（と村田さんは指さして）36年生の茶樹です。樹高は60cm或は75cm程度が標準ですが，この列のように中央部があまり高くならぬように上方へ拡がるようにして，10aの茶樹の延面積が12aぐらいになるようにするのが理想的だとされています。”

”なるほど上手に刈り込むものだなあ”と感心する。

右前方の一帯は磐田市農協の「くみあい肥料展示圃」となっていて，その左側の一帯の茶園のはるか向うに，黙々と雑草をとっているという西尾さんの”おじいちゃん”の姿が見えた。

くみあい肥料展示圃

あとがき　集中豪雨，アベック台風の来襲など，6，7月の両月はさんざん災禍にさいなまれました。天気も良い工合に落付きました。

それでも今後は北は冷害，西は旱越のおそれがあるらしいとのこと。呉々もご留意下さい。なお，都合により本号は企画の1部を変更しました。（K生）